第三講 〈論説〉 時間論・比較社会論

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

こんにち日本語のなかで暦の時間を区切る単位は、日、週、月、年がおもなものである。週の使用はもちろん近代になってからだから（初伝来は十二世紀にまでさかのぼるが）、ヒとツキとトシとが固有のものだ。このうちヒは太陽の、ツキは月のうごきを示していることはいうまでもない。それではトシはどこから来るのか？

トシとは元来、イネのみのりをあらわしていた。人名などで稔という字を、トシとよませるのはそのなごりである。その年の収穫だからイネのみのりをトシとよぶのではない。 （1）

このことは中国語でもおなじで、年という文字は元来、穀物を示す禾を頭につけた人物、すなわちみのりの擬人化である。

多くの原始共同体において、現実的な未来の長さが数ヶ月ないし一年の限度であるのも、人間にとって長期の未来への最初の切実な関心をよび起こすのが、農業生産であるからであろう。農耕においてはじめて人間は、相当長い未来に手にしうる結果のために現在の生を手段化するという、(2)ひきのばされた時間性の回路を張りながら生きることになる。

それは近代の工業社会の、抽象的に無限化された時間からみると、トシのイメージにもあるように、なお （3） と （4） を失っていない。けれどもそれは狩猟や採集の時期とくらべると、すでに飛躍的に間接化された （3） である。

予祝という、この時期の日本人の時間意識の構造を凝縮している行為は、このとおい未来の収穫の確実さへの、祈念の切実さということをぬきにしては理解しえない。

予祝とはいうまでもなく、春の農耕の開始に当たって、秋の収穫を予め祝うのである。平野仁啓が『続　古代日本人の精神構造』で論じているように祈年祭とは、まさしくこのように、その一年の労働の意味に他ならない秋の稔りすなわちトシを、春にあらかじめ祝ってなされるミトシハジメに他ならなかった。

この予祝儀礼によって設定される、聖なる時間と俗なる時間とのいわば「平行関係」について、平野はつぎのように書いている。

祈年の祭によって発動したミトシノ神たちの行為は、聖なる時間においてそのまま働きを持続するのである。小正月の予祝儀礼において、半年を越える未来の刈り上げの豊作を表現しておくことは、未来の収穫期にそれが実現することを約束されることである。聖なる時間において実現されたことは、現実に対する規範として影響しつづけるのであって、現実はそれを模倣する、と信じられたのである。図式的な言い方をすれば、(5)設定された聖なる時間は、俗なる時間と平行して流れているのである。例えば、田の神を、俗なる時間と平行して流れる聖なる時間の神格化された象徴と見立てるならば、この場合の聖なる時間と俗なる時間との在り方がよく理解されるはずである。

すなわちその年のはじめに未来をあらかじめ現在化せしめる儀式が、未だ来ぬトシに向って辛苦しつづける労働の日々をとおして臨在し、(6)〈現在しつづける過去〉の規格をこの未来に与えるのである。くり返しいえば、それはその年の長期にわたって外化された労働の意味に他ならない未来を既定の過去として設定することによって、これを現在しつづけるものとするのだ。

（真木悠介『時間の比較社会学』による）

問１　空欄（１）に入れるのにもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

Ａ　むしろ、繰り返されるみのりであるからこそトシとよんだのだ。

Ｂ　反対に、イネのみのりが一度あることをトシとよんだのだ。

Ｃ　かえって、その年にえられた収穫そのものをトシとよんだのだ。

Ｄ　逆に、その年限りのみのりであるからこそトシとよんだのだ。

Ｅ　じつは、イネのみのりを願うという行為をトシとよんだのだ。

問２　傍線（２）「ひきのばされた時間性の回路を張りながら生きること」について、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

Ａ　農耕においては未来に収穫が得られるかどうか不確実であるから、できるだけ労働する時間を引きのばしていくこと。
Ｂ　農業生産ではその時々の労働に意味づけせずに、未来に収穫という成果を得ることを目的とすること。
Ｃ　短期間で成果を得られる狩猟などと違い、農耕では未来の成果を得るまでに単調な労働の時間を覚悟していくこと。
Ｄ　農業生産では不確実な未来への不安を超克するために、その時期の労働に独自の価値をおいて重要視すること。
Ｅ　農耕ではその時々の労働をそれだけで考えるのではなく、未来に得られる収穫と関連づけながら考えていくこと。

問３　空欄（３）（４）に入れるのにもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

Ａ　確実性　　Ｂ　抽象性　　Ｃ　具体性　　Ｄ　完結性　　Ｅ　時間性

問４　傍線（５）「設定された聖なる時間は、俗なる時間と平行して流れている」について、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

Ａ　日々農民が田において行う労働それ自体が、神の行う聖なる働きの象徴であると考えられていること。
Ｂ　神に豊作を祈ることで、聖なる存在である神が農耕という労働をつかさどる世俗的な存在になること。
Ｃ　祈年の祭で神が実現した豊作が、日々行われる農民の労働の結果としてあらわれること。
Ｄ　刈り上げの豊作を祈るという聖なる儀礼のなかに、収穫による利益を求める農民の願望が隠されていること。
Ｅ　祈年の祭では豊かな収穫が約束されているが、実際の収穫は天候など現実の状況に左右されていること。

問５　傍線（６）「〈現在しつづける過去〉の規格をこの未来に与える」について、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選び、符号で答えなさい。

Ａ　過去の収穫において繰り返し得られた経験が、祭を通して未来の豊作を確実にするために生かされていくこと。

Ｂ　豊作が実現するという祭をあらかじめ行うことで、現在の労働を豊作を実現した過去の労働の再現にすること。

Ｃ　祭をすることで現在の労働の苦労が過去の労働とつなげられ、そのことで過去の豊作も未来につながること。

Ｄ　豊作の祭をあらかじめ行うことにより、それが日々の労働を意味づけ、未来の豊作の保証にもなること。

Ｅ　過去に行われた祭が豊作を実現したように、現在も祭を行うことで未来において豊作が実現されること。

第三講　知識モノ解説

文学史・筆者紹介

●筆者　真木悠介＝まき　ゆうすけ（一九三七〜）東京生まれ。東京大学卒。同大学大学院博士課程単位取得退学。真木悠介は筆名で本名は見田宗介（みたむねすけ）で日本を代表する社会学者。主著『現代日本の精神構造』『現代社会の理論』など

語句

規範＝きはん→守るべきルール
聖＝せい→神や信仰にかかわるもの
俗＝ぞく→日常の暮らしにかかわるもの
擬人化＝ぎじんか→人間でないものを人間であるかのように見なすこと
神格化＝しんかくか→神ではないものを神のように見なすこと
臨在＝りんざい→すぐそばにあるということ

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）日本にコ有の問題がある　①個　②孤　③小　④固　⑤古

（イ）農コウに適した土地を探す　①鋼　②公　③候　④興　⑤耕

（ウ）自然現象をギ人化する　①擬　②偽　③儀　④疑　⑤戯

（エ）シュ猟採集生活から出発する　①種　②守　③首　④狩　⑤取

（オ）先人の行為を模ホウする　①倣　②方　③法　④放　⑤報

（カ）多くの知恵をギョウ縮する　①形　②仰　③業　④凝　⑤暁

（キ）格式ばったギ礼を重視する　①技　②儀　③犠　④議　⑤義

（ク）小麦の収カク量を増やす　①獲　②確　③拡　④画　⑤穫

（ケ）王位の継承者を神カク化する　①閣　②核　③格　④郭　⑤隔

（コ）これまでのキ定路線で行く　①着　②企　③既　④軌　⑤帰

第三講　模範解答

問1　A

問2　E

問3　(3)　A　(4)　C

問4　C

問5　D

復習問題　第三講　模範解答

（ア）④　（イ）⑤　（ウ）①　（エ）④　（オ）①
（カ）④　（キ）②　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）固有　（イ）農耕　（ウ）擬人化　（エ）狩猟　（オ）模倣
（カ）凝縮　（キ）儀礼　（ク）収穫　（ケ）神格化　（コ）既定